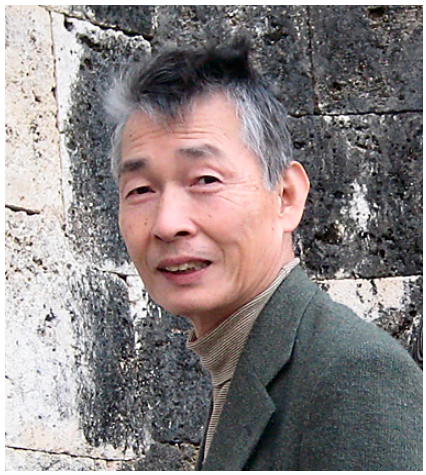
グループリーダー挨拶

国大化学会企画グループ方針

執行役員　企画Ｇリーダー　松本　正和（昭和45年応化卒）



次期企画Ｇのリーダーを仰せ付かりました．

企画は，会長，副会長，役員の声を聞き，国大化学会全般に亘って具体的方向性を示し実施する事が責務と考えます．

会も二期目を迎え，三同窓会を乗せた国大化学会というジャンボ機は無事離陸致しましたが，様々な問題点も見えてきております．

その中でも，私は企画として注力すべきは，会費収入の落ち込み対応と，新しいクラス幹事会の立ち上げかと考えております．これから諸役員・先輩のご意見を頂きながら，７月の総会までには骨子をまとめ提案できるようにしておきたいと思っております．

それにつけても上記２点を含め多くの問題の基にあるのは，各卒年度の連絡網の不備ではないでしょうか．

大先輩方からは仲間の住所が分からないとは信じられないとのお言葉を頂いたことがありますが，特に昭和40年代以降は年度を問わず，連絡網整備が不十分なところ多く，核がいない，連絡を取らない取れない年度が大幅に増えてきています．その結果として住所不明者が増大し，会費納入者が減り，行事参加者も減るというドミノ現象を起こしているのです．

これは気質の変化，学科の変動等いろいろ原因はあろうかと思いますが，私は同窓会の対応が追いついていけなかったことが最大の原因であると考えています．

しかし今からでも遅くはありません．OB学生と同窓会の関係を密にする施策と共に，地道に，年度の核となってもらう人を確認し探し，その人たちを通して改めて旧友達の連絡先を確認し教えてもらう，この輪を広めていけば必ず不明同窓生の何割かは消息が知れるはずです．私はその為の仕組みを作り，主導していきたいと思っております．

上記以外にも，OBの浄財を後輩の教育研究支援に有効活用する為，改めて寄付のお願いをする，どうせ寄付のお願いをするなら企業も巻き込んだレールを敷くことも考える等，今構想を膨らませております．

皆様におかれましても，国大化学会に関わるご意見，ご提案がございましたら，私達にご連絡いただければこれに過ぎる喜びはありません．宜しくお願い申し上げます．

会誌・名簿担当として思うこと

執行役員　会誌・名簿Ｇリーダー　鈴木　恵一朗（昭和45年電化卒）

同窓会の会報・会誌担当となって５年となります．横浜電化材化会の会報を２回（1回/年），国大化学会となり今回を含め５回の編集（2回/年）に携わりました．電化材化会の際には編集担当は実質一人で原稿集めから編集，校正までをほとんど一人で行いました．国大化学会となってからは会誌担当役員が学生役員を含め４人となり，編集事務担当の牧野さんがてきぱきと仕事を進めてくれ，共同作業を進めることができました．

会誌は予定通りに定期的に発行することが重要ですので，国大化学会発足からの２年間，皆様のご協力のもとに年２回の発行をすることができ，担当の一人としてまずは安堵しております．国大化学会が３年目に入るに当り，個人的には会誌の担当もそろそろ引退と考えていましたが，米屋新会長より続けて欲しい，しかもグループリーダーでと言われ，はからずもお引き受けすることとなりました．

会誌は国大化学会と会員を繋ぐ太いパイプであり，総会等になかなか出席できない会員の方々にも会の状況，活動および大学の様子，変化を伝え，また会員の投稿等により会員同士の懇親，意見交換を図る媒体でもあります．皆様，会誌をどの程度読んでおられるでしょうか．また，どう感じておられるでしょうか．皆様に，より興味を持って読んでいただけるような会誌を目指していきたいと思いますが，このためには，皆様からのご意見そして積極的な投稿を是非お願いしたいと思っております．会誌担当として個人的には，会誌に登場する方々が，年齢的にも職業的にも趣味等の各分野的にも更に広がることが，会誌をより魅力的なものとしていくのでは，と思っております．

今回から会誌の春の発行時期を３月から５月に変更しましたが，会の主要行事である総会の開催時期が６月頃に固定してきたことから，春秋の発行号の内容・比重の見直し等も今後進めていきたいと考えております．また，ホームページとの相互乗り入れの点もさらに検討していく必要があるでしょう．

また，名簿については３年毎の発行の予定としており，次の名簿を来年の春に発行予定でおります．個人情報保護の観点から名簿のあり方が色々議論されているところですが，今年度はその発行作業に入っていくこととなります．

会誌・名簿Ｇでは，担当役員のみでなく，協力していただける方々を募り是非一緒に活動を進めて行きたいと考えております．皆様どうぞよろしくお願い申し上げます．

ホームページグループリーダーからひとこと

執行役員　ホームページＧリーダー　横山　幸男（昭和 49 年電化卒）

平成 21 年度から 2 年間，ホームページグループのリーダーを務めさせていただきます．新メンバーは横山のほか，本田清（応化・S54）と細田尚也（物工・H8）のお二方です．国大化学会のホームページは，新同窓会発足以来学外サーバーをお借りして運用してきましたが，事情があって学内にある情報基盤センターのサービスを受けることになり，すでに昨年に移行しました．しかし，今のところ必ずしも運用はうまくいっているわけではありませんので，新しい執行役員会の任期中に整備したいと考えています．平成 20 年度は物質工学科のネットワーク委員長を務めていた関係で，サーバーへのアクセス権を持っていたため，継続してアップロード等の作業を行うには便利であったのが引き受けた理由です．ホームページは今やなくてはならない極めて重要な情報提供の手段であり，同窓生に対する情報源として提供し続ける義務があると考えます．したがって，ホームページの運用は管理者のみで行えるわけではないので，幅広く同窓会員のお力を借りようと考えています．会員各位の近況や随筆，掲載可能な記事やトピックなど奮って応募していただきたいと思います．また，卒業生の何人かにお手伝い頂きたくワーキンググループを発足させますので，その節にはどうぞよろしくお願いいたします．なお，ホームページの URL を，たびたびの変更で大変申し訳ありませんが，この 4 月より **http://www.chem.ynu.ac.jp/ynuchem/** としましたので，よろしくお願いいたします．

同窓会とのつきあい方

庶務・会計グループリーダー　堀　雅宏（昭和 43 年電化卒）

あえてこのようなタイトルで書く気になったのは，本誌の編集委員長から新執行部の庶務を担当するのだから何か書くようにと言われたからでもあるが，同窓会の活性化が言われて久しく，“国大化学会”が誕生して，新会長のリーダーシップのもと打てる手はそれなりに打って来ても会費納入率などにみるように依然として課題があり続けるからである．その遠因を辿ると物質経済・利便性・能率が幅を利かす現代の世相や人間関係の希薄化に行き着くのであろうが，直近の原因としては重なる学部学科改変で連綿と続くはずの糸が乱れ，カリキュラムの関係で 4 年間同じ釜の飯を食べたとはいえない学生時代，インターネットの普及，名簿の編集に関わる個人情報保護法の存在などことかかない．このような状況のもとで，改めて同窓会を考えてみようと思ったからである．

私の場合であるが，国大化学会のルーツのひとつである電気化学科同窓会との関わりは昭和 43 年 3 月に卒業したときに始まったはずであるが，卒業前後に配られて来た B5 版 4 ページ程度の冊子の電気化学科同窓会会報があったという記憶しかない．私はその当時は多分同窓会にあまり関心がなかったので，そこに会を再興された菅要助さん（大正 13 年電化卒）や今も煙州会を続けておられる村松四郎さん（昭和 17 年電化卒）が書かれた文章が載っていたことも，当時は会費制でなく，有志が寄付のように出された維持会費で成り立っていたことも，後になって知ったことである．

私が会にコミットしたのは，私が卒業後に，電気化学科の第四講座の北川徹三先生や小林義隆先生たちが新設された安全工学科に大学のスタッフとして残るようになってからである．大学紛争が一段落した頃，会の世話役を引き継がれた小川忠彦先生（昭和 18 年電化卒）から手伝ってくれないかと言われ，

多分“大学にいるので仕方がないかとしぶしぶ”常任幹事になったとき以来である．役員会では先輩に指示されて，総会や名簿のお手伝いから始めたように思う．

会はその後，会費制になったが，会費請求を名簿や会報と一緒にでなく単独で，毎年会員に発送するようになってから，納入率が上がり，60% を超えた．会の運営にゆとりができたので，会員に還元するために 3 つのこと行なった．校歌や学生歌（みはるかす）の音楽テープ（当時は未だ CD はなく，沢崎俊幸さん（昭和 28 年卒）や尾上秀夫先生（昭和 30 年卒が中心）の作成，記念アルバム“希望の光”から“みはるかす”への発行，卒業後 55 年経た方の会費から維持会費への変更である．私の同窓会へのコミットが本格化したのはこの頃からである．一方，クラス会の幹事役は大学に残っているからという理由で卒業後も 3〜5 年に 1 回は続けて来た．クラスメート・クラス会はどの学年もそれぞれに愛着のあるものだと思うが，主に昭和 39 年から 43 年 3 月までが学窓生活であった私たちの場合，それは入学後まもなく 5 月の清陵祭の仮装行列で一位に入賞して以来で，構成メンバーのキャラクターによると思うが，まとまりのあるよいクラスだった．それ故卒業後も 3〜5 年に 1 回のクラス会は絶やしたことがなく，自身が，比較的時間のゆとりがあった間は，気配りしながら，連絡役として全うしてきたと思うが，仕事の上でゆとりがなくなったとたん，ほとんど溝田君に任せっぱなしで手抜きになってしまった．

私と同窓会やクラス会との関わりはこのようなものであったが，いま振り返ってみるとたまたま母校にお世話になっていたから役員を長く担うようになった私の場合，無意識ではあるが，“同窓会はいいもので，誰もが参加すべきである“という役員の立場からの見方でやって来た自分を反省することしきりである．

僭越かもしれないが，あえて同窓会員を分類すると，①同窓会に積極的に関わり，楽しむ方，②同窓会に関心があり，総会へも出席する方，同窓会に関心があり，会誌を読まれる方，③会誌もほとんど読まないが，会費を払って下さる方，④関心がなく会費も支払わない方，次第に連絡がとれなくなる場合が多い．⑤同窓会との関わりを拒否される方になろうか．私自身にも関心がなかった時期，あっても他が忙しく最低限のコミットしかできなかった時期があり，③とか④になった可能性もあるわけで，いろんな事情であるので，きっかけがない，ゆとりのない，関心を持てる心境になれない場合のあることを忘れないようにすべきだと今にして思う．

同窓会は石を投げれば当るほど日本国中にたくさんあるが，いずれも自動的な入会で，本人の意思は会費納入や名簿作成時に確認されるが，強制するようなものではないので，会費納入率の低さは私が知る限り，どこに行っても役員会の議題である．

同窓会活動への参画は当然で，義務のように（先述の①のように）思っている会員が多ければ理想であるが，少数派であろう．私は長い間，同窓会の事務局にお付き合いさせて頂いたのでいろいろな考えの方にお目にかかった．この中には極まれではあるが，⑤に入る「同窓会に入った覚えはなく，迷惑だから会誌を送ってくれるな」という方，一方，「そんなに無理してやるのは間違いである．そうしなければ維持できないものならばなくせばよい．」という意見もあった．

私はいろいろな人ととりとめもない話をする折りに，「同窓会をどう思っているか」としばしば聞いてきた．相手は本会の会員とはかぎらないし，その方のキャラクターや事情にも拠ろうが，「それは母校は大切だからあった方がよい．しかし，自分は会費は払っているが総会に出たことはまずない．」という人が比較的多かったような気がする．「このような人が半数もいる同窓会であれば運営はあまり心配ないな」などと思ったものである．われわれの会も総会への参加は会員の数%に過ぎないが，このような会員に支えられているのだと思う．年に一回の総会の日に旧交を温めてほしいし，参加者は多いに越したことはないが，今程度でもあまり心配する必要はないのかもしれない．皆それぞれの“事情と心境”があって生きているし，私も 20 代の頃には私の事情と心境で関心度もかなり低いものであったからである．

若いときには関心もゆとりもなかったが，40〜50 才ごろにクラス会を始める（あるいは再開）することはよく耳にする．先日私たちよりいくつか上のクラスの幹事の方であるが，60 代に近くになって会費納入率が上がったとおっしゃっていた．そう思ってよく会報のバックナンバーの卒年別納入者数を見ると，20 代にはゼロであったのが，5 人，10 人と増えているクラスがいくつもある．よく“クラス会には出ても同窓会にはどうも”という方が少なくないことは承知しているが，人生の年輪そしてクラス会を重ねていくうちに少しは同窓会に関心が向いてきているのかもしれない．このようなことをみるとき，それぞれの事情と心境，あるいはきっかけが

ないゆえにコミットされなかった会員も，会誌をめくり，会費を納めてくれるようになるかもしれないので，たとえ，総会などの参加率数%であっても続けてゆくことが大切であると思えて来る．

同窓会は言うまでもなく，“同じ学校の出身者が集まった組織”であるが，届けなるものを役所に出さないし，会員も会に出さない任意団体で，会則はあるが，外部評価など受けることのない，非強制の組織である．われわれの大学でも国立大学の法人化を機に，現学長の飯田先生も大学と同窓会（生）との結びつきの重要性を強調され，はじめて全学部の同窓会連合が組織化され，ホームカミングデイも実施されている．このような同窓会を取り巻く事情は別にしても，戻りたくなったときに戻れるゆるい組織があるのもいいのではないか．ふと手に取れる自分の過去に根ざす読み物があってもよいのではないかと思える．そのためには誰かが労をいとわず会を維持していなければならない．利益目的でないこのような会はいったんつぶしたらまず再興は難しい．このような組織がやって来られたのも歴代の役員の努力やこれを支える卒業生の思いがあったからだと思う．同窓会活動で“経済”だけが重要でないことは論を待たないが，基金を創設された会長，百歳にして会の経済状態を心配して下さる先輩，ご自分の退職時に高額の寄付をされた会員，名簿や会誌に広告を不況の年も出していただいたオーナー社長，そうでなくてもご自分の影響力を使って在任中広告を下さった先輩（いつか本誌でご紹介したいと思う）には会計が赤字の年もあっただけに頭が下がる思いであった．“同窓会は好きなものがやればよい．メリットは何か”という向きもあるが，メリットやデメリットを超えているところに同窓会のよさがあるのだと思う．

会の名簿を見ていたときのことであるが，大正卒の欄は全員が故人であることに気がついて，“このような学年が順次増えて，やがてわれわれの卒年まで来るのだなあ”と思い，感慨に耽ったことがあった．“人間の肉体は死んでも魂は永遠”とは宗教者でなくとも思ってみることであるが，それは自分を知ってくれる人がいてのことだ私は思う．人口に膾炙された作家など一部の人は別にして，普通のひとなら一世紀後の子孫にも怪しいものである．10年以上前の総会の席であるが，会の将来問題として電化材化会の行く末が議論されたときに，林勇二郎さん（昭和12年卒，未来工学の提唱者）が“細かいところはどうでもよいが，会の連続性，連面と続く糸が切れないようにして欲しい”と発言されて私自身は“ハットした”ことがあった．とくにご高齢の方には“後輩が続いてくれているという思い”に意味があるのだと認識したからである．その思いこそ同窓会活動の原点であろう．もちろん会誌の記事の方が意味が大きいが，名簿は最小限この連続性の表記したものともいえよう．名簿はひところ情報量を増やして親しみをもてるようにと，住所・電話番号・勤務先役職のほかにメールアドレス，趣味や仕事についても記載（本人の希望で）を試みたが，不徹底に終わってしまったことがあった．ところが，近年の個人情報保護法である．20年以上前になるが，工学部（横浜工業会）の初の合同名簿が，卒年・氏名・会社名だけの味気ないものになったのに懲りて，次の名簿も個人情報保護法下でも，できるだけそうならないようにしようと同じ庶務担当の關金一先生（昭和56年卒）ともども語り合っているところである．学会の名簿では特定の人しか見られないCD-ROMが利用できるが，幅広い会員の同窓会では従来のような冊子で会員の意思確認と相互信頼の情報管理で行かざるを得ない．この名簿の項目と精度は会費と並んで同窓会の状態を示す指標であるといえるからである．

十年ほど前に隠れたベストセラーといわれた“幸福の研究”という本がある．金属工学者の新宮秀夫さんが書かれたもので，過去の幸福に関する著書をほとんど調べての総括である点がユニークである．そこで著者は困難を克服しての達成感もあるが“感激や感動”こそが，幸せの本質であるとしている．一方，曾野綾子は自著で，打ち込めるものがある人が幸せであるとしている．私が定年を迎えた時に思ったのは“人間の幸福は人間関係の中にこそあるのではないか”ということである．「人生は出会いであり，縁である．これを大切にしたい」これは本学の教育人間科学部の同窓会誌“友松”に当時友松会の会長であられた伊從さんが書かれた手記の趣旨である．もちろん我々の同窓会誌でも同窓生との出会いにまつわる記事も少なくない．出会いは同窓生ばかりとは限らないが，私も同窓あるいは同じ時期に学んだ偶然も大切にしたいと思って来た．事実同窓会に関わる中で多くの方と出会えた．いまの時点でも私が同窓会に関わって来てよかったと思えるのはこのような出会いがいくつもあったからに違いない．いつかこれらの出会いの記事を書いてみたいと思っている．

大学の教育研究環境が少しでも良くなるように！

執行役員　教育研究支援基金運用Ｇリーダー　榊原　和久（昭和 50 年応化卒）

教育研究支援基金運用Ｇを担当させていただくことになりました応用化学科昭和 50 年卒の榊原です．同窓会の若手の会員，特に学生会員の，同窓会への帰属意識や愛校心が稀薄になっている状況の中で，学生会員や日々，学生の教育・研究に尽力下さっている教員の方への経済的な支援を通して，国大化学会の存在意義を認識していただき，同窓会活動の活性化に，少しでも貢献したいと思います．

百年に一度の不況と言われるような厳しい経済環境が，われわれの周囲で生じていますが，大学の教育研究環境も，同じ位たいへんな状況です．ここ 4 年間に文部科学省から配分される積算校費（通常の教育研究経費として各研究室に支給されるもの）は，およそ半分になっています．研究室に配属される学生数は変わりがありませんから，それは，大変な状況です．学生会員の皆様が学会発表をしたり，海外からの研究者が本学に来て，共同研究や講演をして下さる際に，この支援基金を有効に利用していただけたらと思います．大学での教育研究活動が社会に認知され，多くの受験生が横浜国大を目指してくれるようになれば，大学が大きく飛躍し発展する事に繋がりますので，担当させていただく期間，大学と同窓会の間の良い架け橋になれるよう頑張りたいと思います．

平成 20 年度　国大化学会教育研究支援基金　状況

	締切日	応募人数	金　額（円）	年度実績（円）
第一回	4 月末	9	44,000	
第二回	7 月末	13	77,000	121,000
第三回	10 月末	15	59,500	180,500
第四回	1 月末	20	84,000	264,500